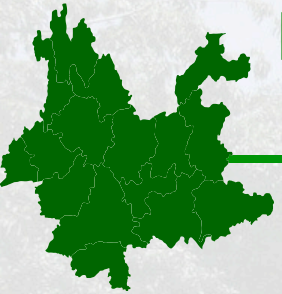
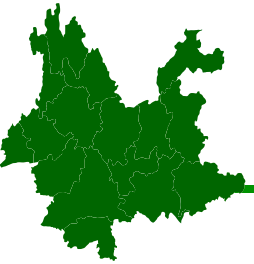


中国西南民族史

4. 唐代雲南の烏蛮と白蛮

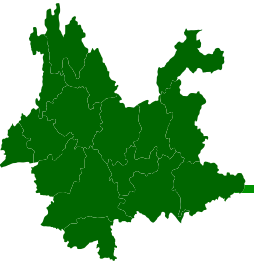


「烏蛮」と「白蛮」

- 「西爨白蛮」「東爨烏蛮」
- 「六詔並烏蛮」

→唐代雲南の多数の民族に対する類別的名称

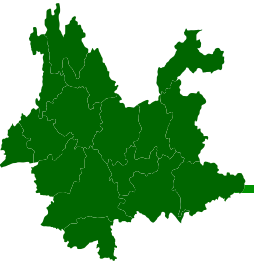
- 『蛮書』・『新唐書』南蛮伝などの史料に頻出



洱海地区の白蛮

- 『蛮書』巻4　（史料4.1）
  - 「弄棟蛮，則白蛮苗裔也。本姚州弄棟県部落。」
  - 「青蛉蛮，亦白蛮苗裔也。本青蛉県部落。」
- 『蛮書』巻5　（史料4.2）
  - 「渠斂趙，本河東州也。…大族有王、楊、李、趙四姓，皆白蛮也。云是蒲州人，遷徙至此，因以名州焉。」

- 洱海地区南部・東南部の盆地の住民



四川南部・涼山州の烏蛮・白蛮

- 『蛮書』巻4　（史料4.3）
  - 「粟粟両姓蛮、雷蛮、夢蛮，皆在茫部台登城，東西散居，皆烏蛮、白蛮之種族。丈夫婦人以黒繒為衣，其長曳地。又東有白蛮，丈夫婦人以白繒為衣，下不過膝」
- 『新唐書』南蛮伝下（史料4.4）もほぼ同じ

- 烏（＝黒）・白が服装の色の違いであると明記

烏蛮･白蛮に関する民族系統論争

- 「烏蛮」「白蛮」が具体的にどんな民族を指すのか（現在のどの民族に相当するか）

→1950年代に日本と中国で論争

1950年代日本での論争

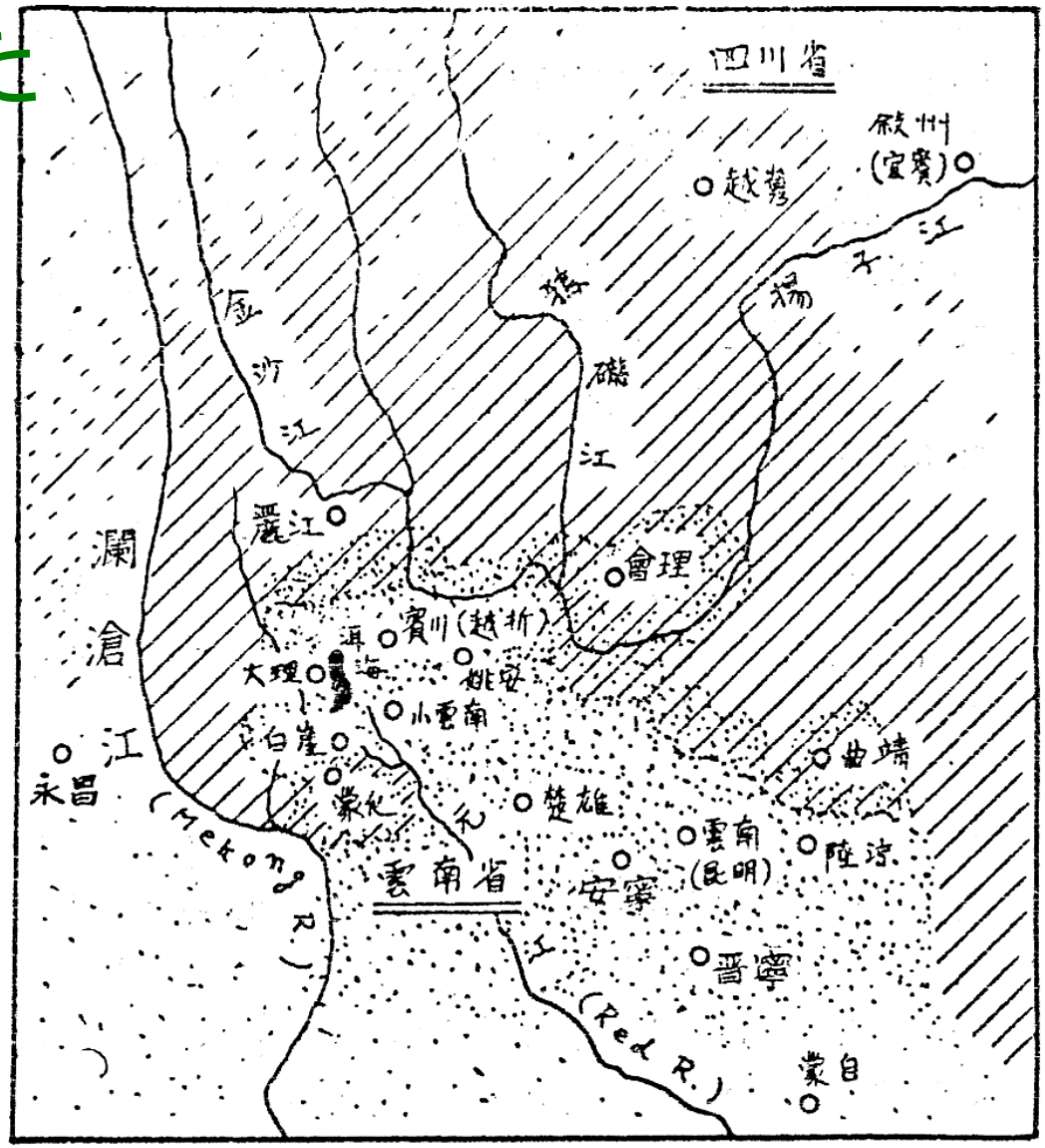
- 白鳥芳郎と牧野巽が『民族学研究』上で論争

- 白鳥の立場:
「私は古く雲南の地に勢力を有した蛮族の烏蛮とか白蛮とかは, 恐らく現在その地に有力な存在者として残っているロロ乃至タイ族のいずれかに関係がなければならないと考えた」

白鳥による白蛮･烏蛮の理解

- 「白蛮はタイ族である」
- 「烏蛮はロロ（羅羅）モソ（磨些）リス（栗粟）などを含む所謂チベット･ビルマ語族である」
- 「所謂民家とは，白蛮たるタイ族が，烏蛮たるロロ族に強化された南詔大理の遺民である」

白鳥の考えた烏蛮・白蛮の分布



第1図　南詔勃興以前の烏蛮白蛮の分布略図
斜線は烏蛮の住地を示し，点図は白蛮の住地を示す

（白鳥, 1953による）

白鳥芳郎「烏蛮白蛮の住地と白子国及び南詔六詔との関係」『民族学研究』17-2, 1953

牧野による「民家族」研究

- 雲南省に現存（1940年代末）する民家と称される種族が南詔・大理国を構成した主要民族の遺存したものである
- 民家族の言語は恐らくチベット・ビルマ語系に属すること
- 元・李京『雲南志略』の「僰人」を民家の祖先とみなし，明清時代に「僰」の呼称がタイ族に移ったことを明らかにする

白鳥の自説訂正

- 白鳥:1980年代から中国人研究者との交流を通じて自説を再考,90年に雲南を訪れたのを機に旧説を撤回
  - 「この白蛮と称される民族の後裔は今日同地域に居住する白族であることは疑いない」
  - 「……ここに白族を泰族に属する民族と説いてきた私の説を改定せねばならない問題が生じてきたのである」

「Ethnohistoryから見た中国西南民族の文化と融合－雲南の白族と彝族の調査に基いて－」『伝統宗教と知識』(南山大学人類学研究所叢書Ⅳ)1991

1950年代中国での論争（白族起源論）

- 白族の起源←南詔の民族系統
  タイ族説を強く否定
  （「領土侵食を狙う『大タイ族主義』の陰謀」）
  大理白族自治州成立に伴う政治的意義が強い

  - 漢族後裔説（否定論者多し）
  - 氐羌説
  - 多種属融合説
  - 雲南土着民族説

1970年代以降の中国における学説

- いずれも漢代の「僰人」との関係に注目

- 尤中：
  - 白蛮＝漢代の僰族（雲南土着）
    →元代の僰人→明清の民家　→白族
  - 烏蛮＝叟・昆明
    →元・明・清の羅羅　→彝族

1970年代以降の中国における学説

- 馬曜・王叔武：
  - 滇僰→叟→白蛮→白爨・僰人→民家→白族
  - 昆明→昆→烏蛮→黒爨・爨蛮→羅羅→彝族

  - 西爨＝爨氏は唐初（南詔国成立以前）には雲南西部をも支配
  - 南詔国時代の強制移住により洱海地区から姿を消す

1970年代以降の中国における学説

- 方国瑜・林超民：
  - 烏蛮・白蛮は「生蛮」「熟蛮」と同様の普通名詞
    地域により指示内容・分類基準が違う
  - 東爨・西爨→同一民族で先進・後進の違い
  - 洱海地区→異なる民族間の先進・後進
    （烏蛮＝昆明・哀牢・磨些
    白蛮＝青蛉・西洱河・雲南・弄棟・漢姓）
  - 嶲州地区→異なる民族を風俗・服飾により分類

史料からいえること

- 六詔の父子連名制＝チベット･ビルマ系の習慣
  →烏蛮：チベット･ビルマ系

- 『西洱河風土記』の生業･風俗
  「西爨」に関する記述
  →白蛮：盆地の水田農耕民

※ただし具体的な「族属」（民族系統，今の何族か）は確証を欠く，あるいは議論することに大きな意味がない

「彝族」の成立

- 1950年代初めに,
  - 四川南部（大涼山州）
  - 雲南東部（昆明･石林一帯）
  - 雲南西部（楚雄一帯）

  に分布し,「夷」と称されていた複数のグループを統合し,「彝族」と命名する

- 彝族内部で方言差が大きく,離れた地区の彝族どうしで言葉が通じない

彝族の女性の服装（紅河州石屏県）

http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hua-Yao-Yi_1.JPG 141119確認（public domain）

彝族の女性の服装（昆明市石林県）

http://zh.wikipedia.org/wiki/%E5%BD%9D%E6%97%8F　141119確認（public domain）

白族の女性の服装（大理市周城村）

白族の女性の服装（大理古城）

大理の市場にて（大理古城内）

白族の男児の服装(?)

唐代雲南のタイ系民族

- 『蛮書』巻4
  - 「黒歯蛮、金歯蛮、銀歯蛮、繡脚蛮、繡面蛮、並在永昌、開南，雑類種也。」
  - 「茫蛮部落，並是開南雑種也。茫是其君之号，蛮呼茫詔。」

- 「雑種類」「開南雑種」とされており白蛮とも烏蛮とも分類されていない
- 分布範囲は現在のタイ系民族の分布とほぼ同じ

『蛮書』と『新唐書』南蛮伝

- 『蛮書』
  - 唐・樊綽（はんしゃく）撰，十巻
  - 作者は咸通年間（860～873）に安南経略使蔡襲の属官として安南都護府（ハノイ）に赴任，現地での見聞を記す。

『蛮書』の構成（1）

- 巻一　雲南界内途程第一
  四川･安南（今のハノイ付近）から雲南へ至る路程
- 巻二　山川江源第二
  雲南地方の自然地理
- 巻三　六詔第三
  南詔国成立前に勃興した六つの王国
- 巻四　名類第四
  雲南地方に居住する様々な民族集団
- 巻五　六[illegible]第五
  南詔国中央部の「州」に相当する諸城

『蛮書』の構成（2）

- 巻六　雲南城鎮第六
  雲南各地の代表的な城鎮
- 巻七　雲南管内物産第七
  雲南地方の物産
- 巻八　蛮夷風俗第八
  雲南に居住する民族の文化
- 巻九　南蛮條教第九
  南詔国の諸制度
- 巻十　南蛮疆界接連諸蕃夷国名第十
  南詔国周辺の諸国（末尾に様々な文書の引用）

『蛮書』の史料価値

- 南詔国に関する第一級史料

- ただし樊綽自身は雲南へは行っておらず，南詔国内の事情に関する記述は794年に冊立南詔使として雲南入りした袁滋の『雲南記』による。

樊綽自身の筆による部分（例）

- 尋伝蛮，閣羅鳳所討定也。俗無絲緜布帛，披娑羅籠。跣足可以践履榛棘。持弓挟矢，射豪猪，生食其肉，取其両牙双挿頂傍為飾，又條其皮以繫腰。毎戦闘，即以籠子籠頭如兜鍪狀。臣本使蔡襲咸通三年十二月二十七日以小槍鏢得一百余人。臣本使蔡襲問梁軻見有竹籠頭猪皮繫腰，遂説尋伝蛮本末。江西将軍士取此蛮肉為炙。（巻四）
- 近年已來，南蛮更添職名不少。（巻九）

『蛮書』版本の問題①

- 『宋史』芸文志 地理類:「樊綽雲南志十巻」
- (元)李京『雲南志略』序:「嘗覧樊綽雲南志」
- (明初)程立本「雲南西行記」(『巽隠集』巻二):「余留麗江,通守張翕出示樊綽雲南志,字多謬誤,非善本也」

『蛮書』版本の問題②

- （嘉靖己酉＝1549）沐朝弼「紀古滇説序」：「樊綽之雲南志，名存而実已亡矣」
- （天啓）『滇志』：「滇中古書，樊綽志絶無伝本」

→明代中期にいったん散逸した

『蛮書』版本の問題③

- 『永楽大典』には本書が『雲南史記』の題で引用されている
（とされるが,『永楽大典』の現存部分には含まれない）

- 清･乾隆年間に四庫館で『永楽大典』から輯集,『武英殿聚珍版叢書』の一種として刊行
→すべての現行本の原本（ただし完本ではない）

- 『蛮書』の書名はこの時つけられたが,『雲南志』が正しいとする意見も少なくない

近人による校注など

- 向達『蛮書校注』(中華書局,1962)
  西域研究の大家である向達が戦時中に雲南に避難していた際に手がけたもの
- 趙呂甫『雲南志校釋』(中国社会科学出版社,1985)
  趙氏は復旦大学出身の唐史の専門家
- 木芹『雲南志補注』(雲南人民出版社,1995)
  師である方国瑜,および自身の見解で向達の校注を補足訂正したもの
- 林謙一郎・武内剛編「『蛮書』索引」(『南方文化』第15輯,1988)　向達『校注』本の本文部分の索引

『新唐書』南蛮伝

- 『旧唐書』南蛮伝が2300余字なのに対し，
  1万数百字と大幅に増補されている

- 多くの部分は『蛮書』から採録しているが，
  現行本の『蛮書』に見られない記載も少なくない

『新唐書』南蛮伝の原資料

- 『蛮書』以外に唐代雲南について書かれた書物は韋斉休『雲南行記』・徐雲虔『南詔録』がある（いずれも現存しない）
  - 前者は『新唐書』芸文志に著録されておらず，『新唐書』編纂時に参照していない
  - 徐雲虔は乾符4年（877）に南詔国に出使『南詔録』は全三巻，上巻に山川風土，中下巻に出使の行程などが書かれていたらしい
- 『新唐書』の増補部分→南詔晩期の記載